岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第140号（2009）13 - 18

訂正的フィードバック：最近のリキャスト研究が示唆するもの

髙塚　成信

Abstract: The effects of corrective feedback on second language (L2) development have recently been investigated extensively from the interactionist perspective. This paper attempts to review the literature on corrective feedback in general and recasts in particular and to deduce some implications for L2 pedagogy from the research, which indicates that types and characteristics of feedback, measures for L2 development, learner responses to feedback, learner L2 proficiency levels and instructional contexts, among others, have variable roles to play in determining how useful a particular type of feedback may be for L2 development.

Keywords: corrective feedback, recasts, prompts, L2 development

1. はじめに

学習者が言語産出において犯す誤りに対して主に教師が行うフィードバックは，「訂正的フィードバック」(corrective feedback) と呼ばれるが，その中でも「リキャスト」(recasts) が言語発達に対して有効なのかどうかに関する研究が，近年非常に活発に行われている (e.g., Lyster & Ranta, 1997; Doughty & Varela, 1998; Mackey & Philp, 1998; Panova & Lyster, 2002; Loewen, 2003; Philp, 2003; Lyster, 2004; Ellis, Loewen, & Erlam, 2006; Ellis & Sheen, 2006; Loewen & Philp, 2006; McDonough & Mackey, 2006; Sheen, 2006)。

これは，意味の伝達を第一義とするコミュニケーションの機会および目標言語において何が正しいのかという情報 (positive evidence) を十分に供給しているはずのイマージョン・プログラムにおいて，学習者が第二言語を必ずしもうまく習得していないという事実 (e.g., Harley, Allen, Cummins & Swain (Eds.), 1990; Lyster, 2002) を契機とするものである。

すなわち，言語理解は言語習得の必要条件ではある（インプット仮説，Krashen, 1985）が，十分条件ではなく，学習者の言語産出とそれに続くフィードバックによって，言語形式に注意を向けさせ，さらには産出した言語を修正する機会を与えることが必要ではないかとする考え方である（アウトプット仮説，Swain, 1985; インターラクション仮説，Long, 1996）。

また，言語形式を一つずつ明示的に提示，練習，産出させる，伝統的な言語指導手順である「PPPアプローチ」によっても学習者は言語の習得に成功しておらず（Ellis, 2003, pp. 28-29），意味伝達重視のコミュニケーションの中で一時的に言語形式に注意を向けさせることが必要であるとする，いわゆる 'focus on form' (Long & Robinson, 1998) の考え方にも影響を受けていると思われる。

そこで，本稿では，最近の訂正的フィードバック，とりわけ，リキャストが気づきや言語発達の促進において果たす役割に関する研究の成果をレビューすることを通して，リキャストを初めとする訂正的フィードバックの教室における効果

岡山大学大学院教育学研究科，社会・言語教育学系，英語教育講座　700-8530　岡山市津島中 3-1-1
Corrective feedback: Recent developments in recasts research and their pedagogical implications
TAKATSUKA, Shigenobu: Department of English Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama, 700-8530 JAPAN

的使用方法について提案することを目的とする。

2. 訂正的フィードバックとリキャスト

訂正的フィードバックには主として，生徒の誤りを教師が一方的に訂正する「明示的訂正」(explicit correction)，生徒に自己訂正を促す「プロンプト」(prompts)（具体的には，メタ言語的なヒントやコメントを与える (metalinguistic clues)，「明確化の要求」(clarification requests) を行う，学習者の発話をそのまま「繰り返す」(repetition),，誤り部分の直前で繰り返しをやめ自己修正を「引き出す」(elicitation) などに分類される)，および「リキャスト」(recasts) があり，明示的なものから暗示的なものへ連続体をなしており，リキャストは最も暗示的なものであるとされる (Ellis, 1999; Long, 2006)。

リキャストは，下の例が示すように，コミュニケーションを継続しながら学習者の誤りを訂正するものであり，学習者の言語的誤りと「並列」(juxtaposition) させ，学習者の伝えたい意味に「寄り添う」(contingency) 形で行われるという特徴を持ち (Loewen & Philp, 2006, p. 537)，「学習者の不正確に形成された発話を教師が正確に述べ直したもの」(Nicholas, Lightbown, & Spada, 2001, p. 720) と定義されている 。

S: The boy **have** many flowers in the basket.
T: Yes, the boy **has** many flowers in the basket.

(Nicholas et al., 2001, pp. 720-721，太字追加)

また，リキャストを通して学習者に提供されるものは，発話に誤りがあるという情報，すなわち「否定的証拠」(negative evidence)，言語的に何が正しいのかという情報，すなわち「肯定的証拠」(positive evidence)，および修正の機会 (opportunities for modified output) であり，言語習得に必要とされる認知的プロセスである，目標言語に関する仮説の設定と検証 (hypothesis formation/testing) やリキャストに含まれる言語や自分の産出した言語との違いへの気づき (noticing a form, noticing the gap) (e.g., Schmidt, 1990) などを促すことができると考えられている。

3. これまでの研究結果と問題点

リキャストの言語習得に対する有効性については，これまで相反する研究結果が出されている。

Lyster and Ranta (1997), Lyster (1998a, 1998b), Panova and Lyster (2002) など一連の研究で明らかにされたことは，リキャストは，イマージョン・プログラムの教室において，最も頻度の高いフィードバックではあるが，生徒は訂正とは受け取らないために訂正的フィードバックとしては曖昧で，自己訂正を促すプロンプトよりも，フィードバックに対する学習者の反応，いわゆる「アップテイク」(learner uptake) を促す効果は低いということであった。

一方，Mackey and Philp (1998) は，誤りがあっても訂正的フィードバックを行わず言語のやりとりのみ行うより，リキャストを行う方が，アップテイクにつながらない場合でも，言語項目の習得を促進させたとしている。ただし，リキャストの対象となった言語項目を学習することができる段階に学習者の言語能力レベルが達していない場合，すなわち「レディネス」(readiness) がない場合には効果はなかった点に注意する必要がある。

また，Long, Inagaki, and Ortega (1998) は，学習者に言語産出をさせず「肯定的証拠」だけを与える「モデル」(models) 提示よりも，言語産出後に「否定的証拠」および「肯定的証拠」を与えるリキャストの方が，言語項目の習得を促進させたとしている。ただし，言語項目によっては効果がないものがあった。

さらに，Doughty and Varela (1998) は，リキャストよりも訂正であることを強調した「訂正的リキャスト」(corrective recasts)（誤りの部分を強調してリピートし，自己訂正を促した後，訂正できなければリキャストを行い，さらに学習者にそれをリピートさせる，つまり，プロンプトとリキャストを結合したもの）は，訂正的フィードバックがない場合より，言語項目の習得を促進させたとしている。

これら相反する結果を導いた原因として，それぞれの研究が，以下の要因について統制していなかったことが考えられる。

① リキャストの対象となった言語項目
② リキャストの種類
③ 言語習得に対する効果の測定方法
④ 学習者の反応の有無と種類
⑤ 学習者の言語能力レベル
⑥ 言語指導環境の特性

以下において，②リキャストの種類に焦点を当

てながらも，その他の要因によっても，どのようにリキャストの言語習得への影響，あるいは実験結果が異なってくるのかを検討することにする。

4. リキャストの種類とアップテイク，訂正

Sheen (2006) によると，リキャストは，複数のムーブ (move)（発話の最小単位）からなるものと単一のムーブからなるものとに大別される。複数のムーブからなるものには，先に述べた Doughty and Varela (1998) のプロンプトとリキャストを結合させた「訂正的リキャスト」や，同一のリキャストをリピートするもの (repeated recasts)，リキャストの後にメタ言語的コメントを付すもの (combination recasts) などがあり，訂正であることが単一ムーブのリキャストより明らかであるという特徴を持っている。

また，単一ムーブのリキャストにも，音調（上昇調か下降調か），範囲（単独か別の発話を続けるか），削減の有無（全体か修正する部分だけか），長さ（全体が長いか短いか），修正の数（一つか複数か），修正の種類（差し替え，省略，追加か），修正の対象（発音，形態素，文法，語彙か）などの特性においてバリエーションがあり，様々な種類が存在する。

このようなリキャストの特性のうち，学習者の反応（アップテイク）に影響を及ぼすものとして，以下のようなことが明らかになっている (Sheen, 2006, pp. 379-380)。

① 長さ：語や短い句の方が節よりアップテイクにつながりやすい
② 修正の種類：差し替えの方が省略，追加よりアップテイクにつながりやすい
③ 修正の対象：発音の方が文法よりアップテイクにつながりやすい

また，アップテイクのうち自分の発話の修正 (repair) につながったものとリキャストの特性との関係については，以下のようなことが明らかになっている (Sheen, 2006, pp. 380-382)。

① ムーブ：複数ムーブの方が単一ムーブのものより修正につながりやすい
② 音調：下降調のものが修正につながりやすい
③ 長さ：短いものが修正につながりやすい
④ 削減の有無：削減されているものが修正につながりやすい
⑤ 修正の数：一つのものが修正につながりやすい
⑥ 修正の種類：差し替えが修正につながりやすい
⑦ 修正の対象：発音についてのものが修正につながりやすい

Loewen and Philp (2006) も類似したリキャストの特性を設定しているが，強勢（誤り訂正部分を強調するかどうか）を加えており，アップテイクとの関係については，強調ありの方がアップテイクにつながりやすいとしている。また，実験結果から，気づきと関係していると思われるリキャストの目立ち度 (saliency) を高め訂正的フィードバックとしての曖昧さを減少させる特性は，［強勢あり］，［下降調の音調］，［削減あり］，［一つだけの修正］，［差し替え］，［発音］であるとしている。

以上のように，リキャストは決して一枚岩ではなく，非常に多様であり得るので，リキャストの特性によりその言語習得に対する効果にも変異があり，異なる実験結果が生じる一因となっていると考えることができる。

5. その他の要因（効果の測定方法，学習者の反応，言語能力レベル，言語指導環境）

効果の測定方法

リキャストの言語習得に対する効果を何で測定するのかによってもかなり違う結果となると思われる。

Loewen and Philp (2006) は，リキャストの言語習得に対する効果を測定するものさしとして，リキャストに対する学習者の即座の反応（アップテイク），タスク遂行中の言語的やりとりにおける自然な言語産出，学習者ごと個別に作成したテストにおいて引き出された言語産出，さらには文法性判断テストのような間接的なものさしまで様々なものが使用されており，どれを使用するのかによって効果の有無の判定に異なりが生じると指摘している。

学習者の反応

さらに，言語習得への効果は，リキャストそのものの特性のみならず，リキャスト後の生徒の反応に依存する可能性が指摘されている。

McDonough and Mackey (2006) は，リキャストが訂正的フィードバックなしの場合より言語習

得に効果的であったが，さらに重要なことに，リキャストに対する学習者の反応が，単にリキャストをそのままリピートする場合より，下の例に示すような，リキャストを導火線 (prime) としてリキャストの対象となった言語項目を含む別の文を直後 (immediate) あるいは後続する (delayed) ターンにおいて産出すること (primed production) がその言語項目の習得に効果的であることを突き止めた。

Primed production (immediate)

Learner: **why he hit** the deer?
NS: **why did he hit** the deer? (recast)
he was driving home and the deer ran out in front of his car
Learner: **what did he do** after that?
(primed production)

Primed production (delayed)

Learner: where where **where you work** this job?
NS: **where did I work**? (recast)
Learner: yeah
NS: I worked in America/it was my part time job during high school for three years
Learner: **why did you like** it?
(delayed primed production)

(McDonough & Mackey, 2006, p. 705，太字追加)

言語能力レベル

学習者の言語能力レベルと効果的な訂正的フィードバックとの関係について，Ammar and Spada (2006) は，プロンプトは言語能力レベルが低くても高くても有効であるのに対して，リキャストは高い場合にのみ有効であるとし，学習者の言語能力レベルと有効な訂正的フィードバックの特性との間に交互作用効果があることを明らかにし，どの学習者にも理想的なただ一つの訂正的フィードバックがあるわけではないことを示した。

言語指導環境

また，Lyster and Mori (2006) は，言語指導環境の特質と効果的な訂正的フィードバックとの関係について，意味の伝達（コミュニケーション）に重きを置くような言語指導環境（例えば，イマージョン・プログラムの教室）では，コミュニケーションの継続を重視するリキャストは学習者によって訂正的フィードバックと解釈されない危険性が高いので，より教育的な特性が強いプロンプトが適切であるが，逆に，言語形式に重きを置く言語指導環境（例えば，伝統的な文法指導を重視する教室）では，コミュニケーション志向のリキャストでも学習者によって訂正であると解釈される可能性が高いので有効であるとし，言語指導環境の特性と有効な訂正的フィードバックの特性との間にも交互作用効果があることを明らかにした。

6. 教育上の示唆と今後の課題

以上のような研究結果から，どのような訂正的フィードバックを行うのが学習者の言語習得を支援できるかを考える参考となる，各教員が置かれている状況の違いに応じて必要な調整を加えることができる訂正的フィードバックに関する「暫定的仕様」(provisional specifications) (Stenhouse, 1975: Ellis, 1999, p. 248) として，以下のことを提示することができると思われる。

① コミュニケーションを行う中で，学習者の言語上の誤りを訂正する手段としてのリキャストを行うことは大変重要である
② リキャストに対する学習者の反応を促し，できれば自分の発話の修正につなげるためには，複数ムーブからなるリキャスト（例えば，プロンプトの後にリキャスト）を行う必要がある
③ 単一ムーブのリキャストの場合には，修正する部分に強勢を置き，修正する部分を含めて短く，また，修正する箇所は一つに留める必要がある
④ リキャストに対する学習者の反応としては，単にリキャストをリピートして修正するだけではなく，リキャストで示された言語項目を別の文の中で使用すること (primed production) を促すことが重要である

7. おわりに

以上，日本の英語教育においてコミュニケーション重視の流れが定着する中で，ともすると忘れがちな，生徒の言語産出における誤りを訂正する

ことの重要性を，訂正的フィードバックの中で最も暗示的でコミュニケーションを継続しながら行うことができるリキャストに焦点を当てて論じ，さらにリキャストが言語習得に対して効果を持つためにはどのよな特性を有しなければならないのかを，最近の研究結果をまとめる形で明らかにした。

注

本稿は，2007年6月9日に関西学院大学言語コミュニケーション文化学会の2007年度講演会（関西学院大学：西宮市）において口頭で行った同タイトルの講演内容に，加筆修正したものである。

参考文献

Ammar, A., & Spada, N. (2006). One size fits all? Recasts, prompts, and L2 learning. *Studies in Second Language Acquisition*, 28, 4, 543-574.

Doughty, C., & Varela, E. (1998). Communicative focus on form. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 114-138). New York: Cambridge University Press.

Ellis, R. (1997). *SLA research and language teaching.* Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R. (1999). *Learning a second language through interaction.* Amsterdam: John Benjamins.

Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching.* Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R., Loewen, S., & Erlam, R. (2006). Implicit and explicit corrective feedback and the acquisition of L2 grammar. *Studies in Second Language Acquisition*, 28, 2, 339-368.

Ellis, R., & Sheen, Y. (2006). Reexamining the role of recasts in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 28, 4, 575-600.

Foster, P., & Ohta, A. (2005). Negotiation for meaning and peer assistance in second language classrooms. *Applied Linguistics*, 26, 3, 402-430.

Harley, B., Allen P., Cummins, J., & Swain, M. (Eds.), (1990). *The development of second language proficiency.* Cambridge: Cambridge University Press.

Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: Issues and complications.* London: Longman.

Leeman, J. (2003). Recasts and second language development: Beyond negative evidence. *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 1, 37-63.

Loewen, S., & Philp, J. (2006). Recasts in the adult English L2 classroom: Characteristics, explicitness, and effectiveness. *Modern Language Journal*, 90, 4, 536-556.

Long, M. (1996). The role of linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T. Bhatia (Eds.), *Handbook of language acquisition: Vol.2. Second language acquisition* (pp. 413-468). San Diego, CA: Academic Press.

Long, M. (2006). *Problems in SLA.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Long, M., Inagaki, S., & Ortega, L. (1998). The role of implicit negative feedback in SLA: Models and recasts in Japanese and Spanish. *Modern Language Journal*, 82, 3, 357-371.

Long, M., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 15-41). New York: Cambridge University Press.

Lyster, R. (1998a). Recasts, repetition, and ambiguity in L2 classroom discourse. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 1, 51-81.

Lyster, R. (1998b). Negotiation of form, recasts, and explicit correction in relation to error types and learner repair in immersion classrooms. *Language Learning*, 48, 2, 183-218.

Lyster, R. (2002). Negotiation in immersion teacher-student interaction. *International Journal of Educational Research*, 37, 237-253.

Lyster, R. (2004). Differential effects of prompts and recasts in form-focused instruction. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 3, 399-432.

Lyster, R., & Mori, H. (2006). Interactional feedback and instructional counterbalance. *Studies in Second Language Acquisition*, 28, 2, 269-300.

Lyster. R., & Ranta, L. (1997). Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in communicative classrooms. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 1, 37-66.

Mackey, A., & Philp, J. (1998). Conversational interaction and second language development: Recasts, responses, and red herrings? *Modern Language Journal*, 90, 4, 536-556.

McDonough, K., & Mackey, A. (2006). Responses to recasts: Repetitions, primed production, and

linguistic development. *Language Learning,* 55, 4, 693-720.

Nicholas, H., Lightbown, P., & Spada, N. (2001). Recasts as feedback to language learners. *Language Learning*, 51, 4, 719-758.

Panova, I., & Lyster, R. (2002). Patterns of corrective feedback and uptake in an adult ESL classroom. *TESOL Quarterly*, 36, 4, 573-595.

Philp, J. (2003). Constraints on "noticing the gap": Nonnative speakers' noticing of recasts in NS-NNS interaction. *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 1, 99-126.

Schachter, J. (1991). Corrective feedback in historical perspective. *Second Language Research*, 7, 2, 89-102.

Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics* 11, 2, 129-158.

Sheen, Y. (2004). Corrective feedback and learner uptake in communicative classrooms across instructional setting. *Language Teaching Research*, 8, 3, 263-300.

Sheen, Y. (2006). Exploring the relationship between characteristics of recasts and learner uptake. *Language Teaching Research*, 10, 4, 361-392.

Stenhouse, L. (1975). *An introduction to curriculum research and development.* London: Heinemann.

Swain, M. (1985). Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.